

# 韓国の中韓街における媽祖信仰の現状 —明の仁川と暗の釜山

安田ひろみ

韓国には共に古くからの港町である釜山と仁川に2大中華街がある。清末に形成され華僑居住地としての歴史は古いが、現在のようない内外観光客向け文化資源としての中華街が開発されたのは、ごく近年である。この他、ソウル・明洞の現中国大使館周辺にも「中華街」があるが、元々小規模だったのが1992年の台湾との断交以来さらに縮小し、中華街と呼ぶのは無理がある。韓国・順天郷大の朴現圭教授の調査<sup>1</sup>によれば、明洞の居善堂には媽祖の位牌が祀られるというが、本稿では規模の大きい釜山と仁川の中華街において現地調査を行った。調査

期間は、2017年8月21日から26日である。

## 1. 釜山中華街と韓聖宮

釜山の中華街は1884年に清の領事館が設置されて以来、草梁洞に官吏や商人が住み始めた華僑居住地に端を発している。長らく単なる華僑の集住地区で、若干の中華料理店があるに過ぎなかったが、釜山市が1993年に上海市と姉妹都市提携した後、韓中善隣外交と中国人観光客の誘致を目的に、上海市と共同で中国風デザインの「上海通り」を造営したことで「中華街」となった<sup>2</sup>。

写真1. 釜山の中華街の門



KoRail（韓国鉄道公社）釜山駅前と立地もよく、華やかな赤と金で装飾された店舗や中国式の大門や壁画を設置するなど、中国風に統一して観光開発されている。だが東区区庁文化観光課によれば、ここは正確には中華街ではなく、「外国人街」である。①中華料理店などレストランを中心とする中華街（上海通り）、②英語やロシア語の看板を掲げたキャバレーや飲食店が並ぶ外国人街の2つの区画に分かれている。①の区域には町役場、ツーリストセンター、華

僑会館、中華中・高校、中国系キリスト教会などの公共施設もあるが、中華料理店に加え、同じ赤と金の統一デザインながら、キリル文字の看板や店頭で白人女性が立っている店が目立つ。これらはウズベキスタンなどロシア語圏からの移民、「高麗人」と呼ばれる朝鮮系旧ソ連人帰国者が経営する風俗店や酒店で、ロシア語しか通じない店も多い。またフィリピン料理店などロシア系以外の外国店も①の区画に出店している。

写真2. 外国人観光街と中華街の地図



つまり、実際には②にあるはずの「ロシア人街」が「中華街」を侵食しており、後者はかなり寂れているのが現状である。マスコミに取り上げられて小さな行列ができている中華料理店も2軒あるが、他は閑散としており、夜になると風俗店や酒店に外国人客が集まる歓楽街といえる。釜山港は1877年の日朝修好条規で朝鮮が開国した際

開港地になって以来、韓国最大の港湾であったため、数十年前からロシア船の寄港地であり、修理等で長期滞在する船員のための風俗・飲食街としての需要が昔からあったのである。中華街以外にもロシア人船員向けの店舗は釜山市内各地にあるが、ここに最も集中している。

釜山の中華街近辺の華僑人口は2001年に



写真3. キリル文字の看板が目立ち、路上に立つ外国人女性も



は約2000人だったが、その後漸減し続けている。1992年8月に韓国政府がほぼ一夜にして台湾と断交、中国と国交樹立した後、韓国内の華僑は大挙して本籍地の台湾や東南アジアなどに移住した。当時は朴正熙時代以来の外国人による土地取得や新聞発行の禁止を始めとする制度上の差別に加え、生活上でも日常的な差別があり、一部地域では韓国人住民による追い出し運動を受けるなど、韓国では華僑が生きにくい事情があった。このため、そもそも在韓華僑人口は諸外国に比べ少なかったが、突然の台湾との断交が韓国政府への信頼をさらに失わせ、移住を決意する契機となったといえる。釜山華僑協会の劉國民氏（53歳）は、華僑学校の人数から考えても往時のほぼ5分の1に人口が減ったと述べている。

現在でも釜山中華街の華僑の多くが台湾籍で、国民党と共に大陸から逃れた山東省出身者とその子孫が大部分を占めている。

一方、宗教的な面では基督教の勢力が極めて強い韓国の影響を受け、中華街内のカトリック教会、プロテスタント教会、エホバの証人等基督教系新宗教団体などの信者が増えている。劉國民氏によると、現在では在住者のほとんどが基督教徒で、媽祖を含む中国民間信仰の信者は誰もいないという。また、中華街及び草梁洞には、韓国人居住者も増えている。

朴現圭教授の調査では、2006年に媽祖廟である韓聖宮が台湾の王徳雄ら台湾人によって影島地区に建立された。韓聖宮は、台北の媽祖廟「慈明宮」の有志「五行会」と、釜山華僑の協力で建てられたという。当時の韓聖宮は3階建てで、木製の媽祖像を祀っていた。だが、後に草梁洞の華僑街に移転し、今は通常時は閉鎖されている。今回は管理者と連絡が取れず、内部を見ることはできなかった。木造1階建ての建物は老朽化して雨漏りを防ぐビニールシートに覆われ、ほとんど廃屋のようにになっている。地

元住民との交渉は全くない。韓聖宮の管理者は在韓華僑のユ・ユフン氏だが、彼は釜山中華街の住民ではなく華僑会館でも東区観光課でも、誰もその名を知らなかった。

韓聖宮ではかつては媽祖生誕祭と昇天祭を行っていたようだが、現在は不明である。建立時に協力したはずの華僑協会は、韓聖宮の祭りには全く関与しておらず、10月の祝祭時のみ台湾から韓聖宮関係者が来て参加するという。10月の祝祭というのは、中華街自体の祭りである「釜山中国城特区文

化祝祭」で、2004年から始まり今年の第17回祝祭は10月20～22日に行われる予定である。地元の「祝祭推進委員会」と東区の共催で、内容は京劇やパレード、韓中の舞踊、K-ポップ・コンサート、中国技芸団公演など、宗教色は全くない<sup>3</sup>。韓聖宮の祝祭参加に関しては、今年は初めて10月21日の媽祖昇天祭に日程が合致したが、4、5、6、9月に祝祭を実施した年もあり、媽祖関連の行事での参加ではなかったと思われる。

写真4. 現在は閉鎖されている廃屋化した韓聖宮



歴史のある中華街があり、媽祖廟が存在するにも拘わらず、釜山中華街で現在の媽祖信仰の衰退を招いた理由は、観光次元と宗教次元の二つが考えられる。一つは、釜山における中華街の相対的重要性である。横浜や神戸などでは、中華街は観光資源の

目玉の一つであり、媽祖関連行事も人気が高い。横浜中華街では2006年に媽祖廟が建立されたが、媽祖は海上交通の神から恋愛や開運の神と読み替えられて、華僑のみならずアニミズム的にすべてを受容する日本人からも信仰やパワースポットとしての注



目を集めている。だが、観光資源の豊富な釜山では中華街自体がそれほどの重要性を持たない。釜山映画祭などの国際イベントや、チャガルチ魚市場、国際市場、梵魚寺、海雲台ビーチなど昔からの名所が多いた

め、行政の支援も上海通り設置以降は区レベルに留まり、観光客の注目度も低い。観光開発として、媽祖信仰を後援する必要性はあまりないといえる。

写真5. 中華街に立つ各宗派の教会



もう一つは、現在はほとんどキリスト教国ともいえる韓国の宗教事情にある。中でも韓国キリスト教の主流である韓国プロテスタントは、他宗教に対し極めて排他的で頑なな傾向があり、仏教はもちろん国民的行事だった儒教の祖先祭祀さえ否定してきた。特に民間信仰は淫祠邪教として排斥される。釜山中華街の華僑クリスチャンに韓聖宮に参拝しないのか聞いた所「そんな迷信みたいなもの」と、やはり否定的な答えが返ってきた。このように、韓国との同化が進み、華僑人口も減少した結果、釜山中華街の媽祖信仰は衰退していったといえよう。

## 2. 仁川中華街と義善堂

仁川の中華街も1883年に仁川港が開港して以来、華僑の居住地として形成された町で釜山中華街同様、歴史は古い。だが、釜山に比べあまり観光資源がない仁川観光の目玉として、行政の支援を受けて近年集

中のに開発・整備された。ソウル地下鉄仁川駅のすぐ前にあり、駅の横には、日中英語の様々なパンフレットを並べ、各国語対応の案内員たちが常駐するツーリストセンター、広い中華街を回るためのレンタ・サイクル店がある。

写真6. 大規模に観光開発された仁川中華街



仁川市中区善隣洞および北城洞に位置し、釜山中華街に比べ圧倒的に広大な面積を占める。建物も釜山では2階建てがほとんどであるのに対し、5、6階建ての高楼が多い。中華料理店、中国菓子店、中国物産店がメインで、歴史的な文化財である中国カトリック教会、中国庭園「韓中園」、中華学校、幼稚園もある。ここも複数の牌楼（中国式大門）、三国志や楚漢志を題材にした壁画通り、京劇や西遊記のオブジェなどで

「中国式」に飾られている。また、テレビ番組の取材や映画のロケ地として人気が高く、中華街を舞台にした連続ドラマも放映中である。

筆者が訪れた8月は、THAAD配備関連の政治的影響で中国人観光客が激減中にも拘わらず、中国人を含む内外の観光客でにぎわっていた。仁川中華街は韓国式炸醬麵である「ジャジャン麵」の発祥地とされる。ジャジャン麵は日本人にとってのラーメン



のような、韓国の国民食となっており、老若男女問わず大変人気がある。これを発明した中華料理店「共和」がジャジャン麺博物館を運営しており、韓国人にとってのキラー・コンテンツである「ジャジャン麺の食べ歩き」が、中華街を訪れる目的の一つとなっている。

仁川中華街の華僑人口は、現在で約3000人と釜山より多いが、中華街の繁栄に便乗した韓国人も数多く中華料理店経営に参入しており、人が集まる場所に必ず出店するトルコ人のアイスクリーム店もあった。

媽祖像がある義善堂は北城洞の中華街中心部に位置し、観光客にも常時公開されている。朝鮮戦争（1950～53）以前は、現パラダイス・ホテルの位置にあったが、1950年の国連軍の仁川上陸作戦で被災し、移転した。黄色の外壁に八仙図の壁画が描かれ、「仁川華僑協会指定文化財1号」である。説明板には「1893年頃建立」としているが、朴現圭教授は実際には「慈航普渡」の扁額の作成年代から1916年とは見ている。

写真7. 義善堂の内部と外観



中に入ると、諸神を祀る正殿の横には敬老庁があり、地域の老人の憩いの場になっている。正殿の横には賽銭箱を設け、礼拝用の香を販売しており、香炉の使用状況からもここが観光名所ではなく信仰の場であることが伺える。廟は完全に中国式で、門

前の説明版には「胡山太爺、竜王爺、関羽、観音、子孫娘々を祀る」とあり、媽祖の名前は出てこないが、廟内には5つの小神殿が設けられ、一番右が海神娘々即ち、媽祖の神殿である。それぞれの神像の上には扁額、後ろには神画、前には香炉と賽銭箱があり、

媽祖像の扁額は媽祖ならでは「慈心濟世」「婆心濟世」である。この他、正殿の左右の壁には西王母や呂祖などの絵が掲げられている。

義善堂の管理者である姜会長は義善堂の向かいの大規模な菓子店の店主で、自身も伝統宗教を篤く信仰しており、香や供物を毎日捧げ礼拝している。仁川中華街にはこうした華僑は少なくなく、3月23日の媽祖生誕祭には祭礼を行っており、旧正月の中華街祝祭もある。

華僑協会によると仁川中華街の住人も、山東省出身者が多く、朝鮮朝(李朝)時代や国共内戦後に船で渡ってきた。長らく対中貿易を行っていた濟州島で下船した集団も、釜山で降りた集団もいた。仁川華僑協会の楊女史は山東省からの移民一世であり、5隻の船を所有する豪商だった父と共に1949年に濟州島に渡り、濟州華僑と結婚し、後に仁川に移った。彼女によると、仁川の華僑は仏教徒が多いため、伝統宗教を大事にしているという。媽祖を信仰しているのは年配者だけではなく、若い人もいる。義善堂の被災に関しては、「朝鮮戦争の直前、突然全く理由もなく義善堂から火が出た。その際、媽祖が昇天するのを見た人が多数いる。その直後に戦争が起きたので、媽祖が戦争を予知して昇天することで住民に災厄を知らせたのだと言われた」という新たな伝説が語られていた。楊女史は幼い時この話を沢山の老女から聞いたそうだ。

このように、仁川では釜山と異なり、媽祖信仰が生きている。その理由は幾つか考えられるが、まず楊女史の言葉が正しければ、民間信仰と親和性が高い韓国仏教徒が多いことがあげられる。韓国の巫俗(シャーマニズム)は仏教と習合しており、巫俗の信仰者は主に女性だが、彼らは仏寺にも通うのが普通である。韓国のシャーマンが「万

神」と呼ばれるように、巫俗の神々は非常に多数で、仏教、道教、歴史的人物が英雄神になったもの、巫俗独自の神々等、極めて多様でもある。そのため、媽祖のような中国系の神も受け入れられやすいといえよう。華人側もこうした韓国仏教の影響を受けたと考えられるかもしれない。

そして仁川観光の目玉として行政のバックアップがあり、管理者が地元の間人であるため、義善堂の維持管理がしやすい事、そして中華街自体の繁栄から、経済的・精神的に余裕のある住民が多い事なども考えられる。さらに付け加えれば、地理的な理由がある。韓国第二の都市である釜山の中心部に位置する釜山中華街に比べ、仁川国際空港ができるまでは、郊外の僻地であった仁川華僑居住地は長らく孤立していた。そのため、韓国社会のキリスト教、特にプロテスタントの影響を受けにくかったといえるのではないだろうか。

仁川中華街では中国語しか喋れない老人が少なくなかったが、中華学校に通う高校生であるにも拘わらず、全く韓国語が分からない少年がいた。韓国語の授業がないのだと思われる。彼はニューカマーではなく仁川生まれで、家業の中国雑貨店を手伝っていたが、この一家は皆韓国語ができなかった。この店の店頭に屋台を出していたトルコ人露天商によると、韓国語ができない商店主や地主と店舗の賃貸等の契約をするためには、韓中両国語が堪能な専門の仲介業者が通訳して手続きを代行するのだという。孤立したコミュニティで完結した生活を送ってきたため、近年観光客が殺到するようになるまで、中国語のみで不便はなかったようだ。

だが現在、仁川中華街内には、新たにプロテスタントの複数の教会、幼稚園ができており、韓国社会・文化とのエンカウンターともあいまって、今後キリスト教の影響が出てくるかもしれない。その場合、将



来、媽祖信仰が揺らいでいく可能性も否定できないといえよう。

本稿は、京都文教大学人間学研究所共同研究プロジェクト「日本における海外の民間信仰と宗教の習合に関する現状調査—中国ルーツの信仰を中心に」（研究代表：潘宏立、林雅清）の研究成果の一部である。執筆に当たっては、潘、林による茨城県の媽祖信仰調査に同行し、韓国と日本との媽祖信仰の実態とその要因の比較に関して両氏と討議した内容を参考にしている。

- 
- 1 朴現圭「韓国所在媽祖現況」（中文）、『2015国際媽祖学術研討会論集』  
李定勛、唐田「中国媽祖信仰の韓国的変容と海洋文化」（韓文）『2016国際媽祖学術研討会論集』
  - 2 国立民族学博物館共同研究会「釜山華僑街における“上海通り”に“複製された街”をみる  
とき：展示における「複製」をめぐって」  
<http://www.page.sannet.ne.jp/hayaf/fukusei.htm>
  - 3 釜山チャイナタウン特区祝祭HP <http://www.busanchina-f.com/sub2/sub1.php>